

第3回(1月) 会議録(主な意見)

講義「コミュニティ・スクールと地域学校協働活動の一体的推進 ～妙高市斐太北小学校の取組をとおして～」

(内容)

・コミュニティ・スクールの意義

- ・学校運営協議会は「承認(OK)」だけでなく「協働(Let's)」の場。
- ・地域と学校が連携し、子どもを中心に教育環境を整える。
- ・地域の課題と学校の課題を掛け合わせて、相乗効果を生むことが重要。
- ・継続的な活動とコーディネーターの役割が重要。
- ・地域学校協働活動推進員(コーディネーター)が人・活動をつなぐ役割を担う。

・魚沼市の事例

- ・「自己肯定感の向上」をテーマに地域と協働。
- ・地域の祭りに100人規模で参加、販売ブース設置、ゴミ拾いなど。
- ・地域との関わりを通じて、子どもたちの主体性が育まれ、自己肯定感が向上。

・斐太北小学校(妙高市)

地域の教育力が高く、ESD(持続可能な開発のための教育)に力を入れている。

・学年別のESD活動

- 1年生:ヤギの飼育、地域公園での交流。
- 2年生:野菜作りと販売(道の駅で販売)。
- 3年生:地域のお宝発見(寺院や企業訪問)。
- 4年生:川の源流から下流までの調査。
- 5年生:米作りと販売(新幹線駅で販売)。
- 6年生:地域ガイド活動、佐渡市との交流。

・CS委員との連携体制

- ・年3回の「未来トーク」で年間カリキュラムを検討。
- ・年間5～6回のCS会議で活動の振り返りと改善。
- ・委員は活動時にネームタグ着用、顔写真ポスターで児童との関係構築。

・持続可能な組織運営、取り組み

- ・CSは学校から独立した組織として運営。
- ・事務局長が中心となり、横のつながりを重視。
- ・SNSを活用し、活動案内・報告・保護者への情報共有を迅速に行う。
- ・委員のモチベーション向上、学校業務の負担軽減に貢献。
- ・年初にA2カレンダーを作成し、地域全世帯に配布。

- ・地域副読本の作成(地域の歴史・文化を調査・編集)。
- ・学校発行の「ESD だより」で活動を発信。
- ・SNS で活動報告を共有し、保護者からの感謝の声がモチベーションに。

・成果

- ・「学校を忙しくしない」「学校の困りごとに対応する」ことを理念に活動。
- ・地域と学校が Win-Win の関係を築き、児童の資質・能力の育成に成果。
- ・2015 年から CS 活動を開始し、今年度で 10 年目。
- ・保護者や地域住民を巻き込んだ持続可能な組織づくりを目指す。
- ・地域と学校が協働することで、児童の自己肯定感や主体性が育まれる。
- ・地域課題と学校課題を掛け合わせて解決する「プラットフォーム」としての CS。
- ・持続可能な学校・地域づくりを目指し、Win-Win の関係を構築。

(委員からの主な意見)

- ・公民館がある地域では、学校と地域の結びつきのツールとして機能している。
- ・地域資源の違いを踏まえた柔軟な CS 運営が必要。
- ・地域の参画が教育活動の質を高めている。
- ・学校だけではできない教育を地域が補完してくれることに感謝。
- ・「学校を忙しくしない」「困っているときに支援する」という CS の理念に共感。
- ・学校と地域が Win-Win の関係を築いている点が素晴らしい。
- ・CS が独立した組織として機能している点に注目。
- ・SNS を活用した情報共有が効率的で、柔軟な運営に貢献している。
- ・同窓会から CS への移行がスムーズで、10 年かけて体制が整備されたことを評価。
- ・PTA は CS とは別組織だが、保護者の協力体制は整っている。
- ・「未来トーク(年間カリキュラム検討)」は、熟議から発展したもので、活動の質が向上している。
- ・地域住民が講師や支援者として学校活動に積極的に参加している。
- ・活動は単発的なものから、年間カリキュラムとして体系化されつつある。
- ・地域の人々が子供と関わることで、喜びや生きがいを感じている。
- ・地域の教育力を活かした活動が、子供にも大人にも良い影響を与えている。
- ・カリキュラム化の過程は、地域の積み重ねと学校の要望への柔軟な対応によって実現。
- ・CS の独立性が新しい地域住民の参画を促進している。
- ・同窓会は閉じた組織ではなく、開かれた CS 組織が地域の多様な人材を活かしている。
- ・子供だけでなく、地域住民の自己肯定感も高める活動になっている。
- ・地域全体の幸福感(ウェルビーイング)に繋がる取り組みとして高く評価。